

全線再開 涙こらえ運転

復興の
大動脈

ホームに詰めかけた地域住民の笑顔や「ありがとう」「おめでとう」の横断幕。2020年3月14日、9年ぶりに全線再開したJR常磐線いわき一原ノ町間の始発列車を運転した青木拓一さん(41)。「いわき市」はその光景を忘れることはない。「『ありがとう』と思いつながら、涙をこらえて運転した」。沿線住民だけでなく、青木さんにとっても念願の瞬間だった。

「地域に根差した仕事しなかった。電車は身近な存在で、大きなものを背負っている」と思った。磐城高卒業後、JR東日本に入社。先輩の話に興味を持ち、5年目に運転士になった。

運転士として5年の歳月が過ぎようとしていたころ、東日本大震災、東京電力福島第1原発事故が発生した。常磐線は寸断され、自身も約4カ月間にわたる自宅待機を余儀なくされた。「富川から仙台まで、一直線で行けるのが常磐線の強み。不通区間があったら成立しない。どうにか再開してほしい」と思っていた。

9年後、その願いがかなった。

JR東 青木さん「被災者から勇気」

「古里が生きている」
全線再開当日。一審列車で野放しで雑草だらけになっていた畑やバリエードに囲まれた街並み、人けの少ない区間を抜けると、沿線やホームには地域住民の笑顔があふれていた。「久しぶりに帰ってきた息子を迎えるように喜んでくれた。被災住民を手助けしよう」と思っていた。運転士としていたが、逆に勇気や力をもたらした。全線再開から5年、乗客は徐々に増えてきた。運転席からは真新しい住宅や、商業施設の建設が進む被災地の様子が見える。線路に飛び出しているのも、復興が進んでいる一つの証しだと感じている。それでも復興は道半ばだ。



「『古里が生きている』と思ってもらえるまで常磐線は走り続けていかなければならない」と語る青木さん＝5日午後、いわき市

「単に人や物を運ぶのではなく、出会いや別れ、人の心も運んでいる」と自負する常磐線。だからこそ、被災地を走る運転士として胸に深く刻んだ思いがある。「元々住んでいた人たちが戻った時に『古里が生きている』と思ってもらえるよう、常磐線は走り続けていかなければならない」
おわり

この連載は須田純一、国分利也、佐藤智哉、小磯佑輔、佐藤健太が担当しました。

■31億円の赤字 JR東日本は昨年10月、利用者が少ない路線の2023年度の収支を公表した。常磐線いわき一原ノ町間の赤字額は31億2300万円、公表した全72区間のうち3番目に大きかった。

▲ 3月6日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと (330字程度)

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

青木さんの復興や常磐線への思いについて、どんなことを感じたかまとめてみましょう。

